

## 研究生研究報告

### 日蓮聖人における見仏について

都守基一

日蓮聖人における成仏について考える一助として見仏に関する説示の整理が必要となると思われる。見仏思想は聖人が依経とされた法華経においても、第一の破折の対象とされた浄土教においても重要な意味をもっていたからである。

今が末法であることを強く意識して仏を渴仰し法を求められた聖人は、釈尊の真意を法華経に見出し、法華経を見聞することが釈尊を見たてまつることに他ならないとの信解に到達された。そして浄土教批判の理論書である『守護国家論』では、浄土・法華両宗で見仏の利益が期待されていたことをふまえ、法華経の行者は易行にし

て諸仏菩薩を見ることができるところを、法華経即釈尊・十界互具の論理によって論証された。これ以降の著作において直接見仏が問題とされることはないが、聖人の見仏の信仰はいよいよ高潮し、佐後の聖人独創の法門へと形を変えて継承されてゆくのである。すなわち『本尊抄』の受持成仏は本仏釈尊の实在と能動を前提とする自然讓与の成仏であるから、その仏を見ることなしに自身が仏に成ることはできない。ここに目に見える対境としての本尊が奠定されなければならない必然性が生ずるのである。また『本尊抄副状』等の靈山往詣の信仰は、仏の勅命による忍難弘教を全うし再び仏に見えることの切望と法悦の表白に他ならなく、浄土教のような往生の手段としての来迎見仏ではなく、見仏のための往詣である。ただし見仏を現世の利益や所期として強調されることはな

く、むしろ別稿で指摘したように仏天の行者守護という表現で感応・利益を示される場合が多い。この点は法然や親鸞にも共通する傾向で、凡夫の見不見にかかわらず確に仏に知見されている事実を重視されたためであろう。しかしながら聖人は寿量品に要請されているとおり身命をも惜まずあくまで見仏を求めて息まない姿勢を法華経の行者の理想とされていたことは、「故阿仏房は一心欲見仏の者なり。あに臨終の時積迦仏を見まいらせ候はざらむ」との断簡が現存する一例により明らかである。

いづれにしても日蓮聖人御自身が「一心欲見仏の者」であられたことは疑いのないところであろう。

(日蓮教学研究所宗費研究生)

## 日蓮聖人の禅宗批判の基底

### 三輪是法

日蓮聖人は、「禅は天魔の所為」と批判されている。では、日蓮聖人が見た禅宗とは如何なるものだったのであろうか。

日蓮聖人の禅宗批判に関する研究は、岡田栄照氏「日蓮の禅批判について」、増永靈鳳氏「日蓮上人の禅宗批判」、川添昭二氏「日蓮の禅宗破について」、高木豊教授『日蓮とその門弟』、田村芳朗氏『鎌倉新仏教思想の研究』、同「日蓮における諸宗批判の根拠」、川上大道氏「日蓮聖人における禅宗批判の問題」、同「日蓮聖人の禅宗観―大日能忍に対する批判―」などがあり、更に『日蓮宗事典』に「四箇格言」の項目で、浅井円道教授が述べられている。以上の研究から、まず時代背景として、禅宗と政治権力（北条時頼）との密接な繋がりが存在していたことを知る事ができる。これは臨済宗に限

定され、道隆、弁円などの名があげられている。また当時、禅宗批判が既成教団側から既になされていたことや、歌論（野守鏡）に見られるということが指摘され、社会的に一般化していたことが理解される。その根底には、禅宗の興隆によって、叡山仏教が衰退した、という認識が存するようである。更に、批判される対象としては、特に日本達磨宗の大日能忍の名があげられている。これらが史実として踏まえなければならぬ事項である。う。

日蓮聖人の批判内容に関しては、社会的批判と教理的・思想的批判に分けられる。前者では、当時の災害の原因として禅宗を批判される場合であり、後者では禅宗の典籍に見られる独自の思想的立場を批判される場合である。この中で、教理的批判においては、『蓮盛鈔』、『諸宗問答鈔』といった真偽が問われる御遺文に依っていることが多く見られ、更に検討していく余地があるものと思われる。

そこで、真蹟現存・曾存の御遺文に見られる批判を窺うと、「教外別伝、不立文字」、「毘廬の頂上を踏む」、「修多羅の教は月をさす指のごとし」、「禅は仏の心、法華経は仏の言也」という教理的特徴をあげて批判されていることや、依経として楞伽経、首楞嚴経（『一代五時鷄図』定本二二三三五頁には、他に大円覚経・諸法無行経・金剛般若経・一切経をあげられている）をあげて批判されていることを知る。また批判対象としての固有名詞を求めると、禅宗寺院では、建仁寺、寿福寺、建長寺の名が、禅僧では達磨、慧可、大日能忍、聖一国師（弁円）、道隆、三階禅師といった名が見られる。今後は、御遺文中に指摘されている禅宗批判に関する説示をまとめ、批判のもととなる禅典籍を明らかにすることで、日蓮聖人が、社会的な面と教理的な面の二方向から批判される禅宗の実体と、批判の論拠を明確にしていきたい。

（日蓮教学研究所宗費研究生）

## 水戸徳川家の法華信仰

佐々博史

近世日蓮教団史の研究は、今日まで「不受不施」をはじめ、寺院組織、書誌学、庶民信仰、武家信仰などを視点として研究がなされてきた。なかでも武家社会の法華信仰については、望月真澄氏が、江戸城大奥女性の法華信仰については、身延久遠寺の出開帳を事例として論究している。その中で大奥女性の信仰形態は開帳への参詣や御札・御守・御符等を持ち帰るといった御利益信仰的な要素が中心となっていることを指摘した。そこで本稿では江戸期における武家の信仰形態の一端をさぐるため、水戸徳川家の人々の信仰を事例としてとりあげたい。

徳川御三家の中でも紀州、水戸家の藩祖は熱心な法華信者の養珠院が生母であり、また水戸家二代藩主光圀の生母久昌院も熱心な法華信者であった。久昌院が没すると、光圀は追善供養の為に寺院を建立した。これが久昌

寺である。

筆者はこれまで「山吹日記」、「桃源遺事」などの史料をもとに久昌寺の開創の経緯について考察してきた。すなわち久昌寺は当時の触頭制度によって、身延久遠寺、池上本門寺、京都本圀寺、中山法華経寺、越後本成寺、京都妙満寺と共に触頭本山となって江戸に役寺をもち、一派として幕府から認められていた。このうち久昌寺のみが近世に入ってから建立されており、他の本山と比べ歴史的背景を有していない点が、きわめて特徴的である。

そこで、今回の研究課題として、水戸家における具体的な信仰形態を探るため、三代藩主綱条つなえだとその室季姫すえひめの信仰的営みについて少しく考察する。

まず、綱条は七年前に焼失した池上本門寺の経蔵と鬼子母神堂を享保二年に再建立している。また「経王宝殿」の扁額を久昌寺に記して納めたことなどが注目される。いっぽう季姫は京都公家の菊亭今出川公規の娘である。

今出川家は京都本圀寺を菩提寺とし、本圀寺十七世日恒は今出川季持の弟、同十八世日運は今出川家の猶子となっており、また遠沾院日亨は今出川伊季の舎弟となっている。このように今出川家は日蓮宗と深い関わりがあった。

季姫の具体的な信仰活動は、『日乗上人日記』によれば法華経書写行、久昌院の年回忌などの追善供養に代参していたことが知られる。

また、久昌寺に於いて開催された「久昌院追善法楽和歌会」(法華経の品品を題として詠む)の会に水戸家の人々をはじめ綱条と季姫は参加をしていた。このようにみるかぎり水戸家における信仰活動は追善供養を中心とした営みであったことが一つの特徴として、指摘できるであろう。

今後、水戸家についてさらに考察すると共に、紀州家や諸大名の信仰形態を論究することによって、江戸の家社会における法華信仰の動向を説明することを課題と

したい。

(日蓮教学研究宗費研究生)

日蓮聖人遺文における譬喩について

高森大乘

五百篇にもものぼる日蓮聖人の著作や書状の中で譬喩の記されていない御遺文は皆無と言ってよい。にもかかわらず、過去にこれを取り上げて研究を行った論文は数少ない。また、あったとしても譬喩の用例を文体論的に分類・考察するにとどまり、譬喩活用の根底にある教義や思想との会通にまでは至っていないのが実情である。そこで、御遺文中に説示される譬喩の教学的解釈を試みんとするのが、当研究の目的である。

そもそも譬喩とは、伝達すべき主旨を日常的・現実的な例話に引きあわせて平易に説き明かすことを目的とする表現法で、日蓮聖人もこれを巧みに用いることによっ

て仏教の難解な法門や聖人自身の思想に対する門弟の理解を要易ならしめようとされたわけである。ここで忘れてはならない点は、譬喩の背景には必ず教義や教学が存在するということである。即ち聖人の生涯を通じた教えの変遷というものが、譬喩活用の姿勢にも如実に反映されるのである。また、聖人の内証の展開によって、従来の経論釈において一般的であった譬喩の概念とは別個の、聖人独自の解釈に基づいた用いられ方をされる場合もある。例えば、法華経の薬王品の十喩は、『法華文句』十下によれば「経の勝劣」を判ずる经文として解釈され、宗祖も佐前期においては天台と同じ立場を踏襲されていたが、佐渡流罪を転機として聖人の行者意識の高揚とともに「人の勝劣」を判ずる証文とされるに至ったことなどが指摘できる。

これらの事実から、聖人は一つの譬喩を自己の立場や対告衆の心情に基づいて多角的に捉え直し、また新たな意味付けをなして、随時・随機的に活用されたことを知

ることができる。かくして譬喩は、生きた言葉として受け手の心に染み入って、釈尊や宗祖の内証を共有できたという随喜の気分を呼び起こし、説かれるところの教えとともに信受されていったと考えられるのである。

(日蓮教学研究所宗費研究生)

### 日蓮聖人の不軽菩薩観

渡辺彰良

日蓮聖人は法華経の行者としてその意志を貫かれ、為に四度の大難を始めとして数々の法難に遭われてきた。幾多の迫害にも負けずに但行礼拝を生涯にわたって貫き、ついにはその功德により仏道を成じた不軽菩薩の姿は、宗教者日蓮を支える一翼を担った。

日蓮聖人遺文に現れる不軽菩薩に関する説示を見ると、謗法成仏・折伏逆化・下種論・日蓮聖人と不軽菩薩の同異・二十四字と五字の関係など、多くの問題が存在

する。聖人は初期の頃から不軽に関して言及しており、『守護国家論』には謗法墮獄の例証として「不軽輕毀の衆」が挙げられている。しかし、この頃には聖人と不軽の関連については、特に述べられていない。

伊豆配流中述作された『顯謗法抄』で「悪口罵詈、杖木瓦石」の文を引いて、この経文の心は法華経の行者を悪口し、打擲する者がその罪により地獄に墮ちるのである、と述べられている。聖人は伊豆流罪を契機として法華経の行者の自覚を持つに至ったが、ここでは不軽を法華経の行者と呼んで自身と対比されている。これは聖人の法華経色読体験が不軽に匹敵するという自信の表れである。聖人は受難を法悦に変える事で苦難を乗り越えて行かれたが、不軽の迫害の様は聖人自身を連想させ、後に仏道を成じた事実はこの上ない法悦となった。

佐渡配流の道中述作された『寺泊御書』には、色読成就の悦びの中、「法華経は三世説法の儀式也」と述べられている。そこで「日蓮は不軽たるべし」と自らを不軽

と同等視している。これは、聖人が佐渡流罪によって始めて可能となった境地であろう。『顯仏未来記』に「彼の二十四字と此の五字その語殊なりと雖もその意これ同じ」等と自身と不軽とを一つ一つ対比して、同じであると断じている。これは法門の正当性を証すとともに、聖人の宗教的自負が不軽菩薩によって支えられている事の現れである。

(日蓮教学研究所宗費研究生)

#### 日蓮聖人の釈尊観の一考察

松代邦義

日蓮聖人は、『顯仏未来記』に三國四師という表現によって、法華経流通史の系譜を明らかにされている。すなわち、御自身を釈尊、天台、伝教、日蓮という三國の流れの中で、法華経を相承している者として位置づけられているのである。

ところで、『法華経』の法師品第十では、「而も此の経は如来の現在すら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや」、あるいは安樂行品第十四では、「一切世間に怨多くして信じ難し」と述べられているように、釈尊の在世、滅後にわたり、法華経を覚知し、あるいは流布する者への迫害があることが語られている。言いかえると、法華経のあるところには、必らず種々の迫害があり、その迫害を受ける人を「法華経の行者」と規定されている。

ところで、日蓮聖人御自身は、经文を色読されることによって、法華経の行者としての自覚を深められ、それと同時に法華経を覚知された釈尊を、法華経の行者の先駆者として尊敬されていることに気づくのである。

日蓮聖人は、末法の法華経の行者のあかしとして、勸持品第十三の「三類の強敵」の文を色読されるが、釈尊を法華経の行者とされたのは、「九横の大難」にあわれみからである、と見なされていることによるのである。そこで、釈尊の受難を「九横の大難」と述べられる根

拠についてたずねてみると、『大智度論』に「九の罪報」とあることから、これらに拠られたのではないかと思われる。

しかし、聖人遺文中に「九横の大難」と記述されている箇所を見て行くと、九種の難が整束して記述されておらず、『大智度論』等の説示と重なる部分もあるが、全くそれと同一とは限らないことに気づく。

これらの点については、今後さらに検討してみたいと思う。

(日蓮教学研究所宗費研究生)

### 日蓮聖人の治病観

—富木尼への教導を中心に—

野口眞澄

日蓮聖人は、何人かの檀越の病悩に、消息を以て慰問されている。その病への教導は、常に法華経による本質的な救済を根底に据えて述べられているが、その説き方



には対告衆による異なりが見られる。日蓮聖人の治病観を捉えるには、まず対告衆別に検討する必要がある。ここでは富木尼を例にとってみよう。

富木尼は、檀越であり後に入道した富木常忍の妻であり、夫婦ともに聖人によく仕えたことが賜書の内容から伺われる。富木尼の病を慰問した消息としては『可延定業御書』、『富木尼御前御書』が挙げられる。

富木尼の病に対する最初の教導であろう『可延定業御書』の冒頭には、「病」と「業」についての対句的な表現がなされている。その共通点は、共に対処可能であり、対処すべきものとして提示されていることで、「病」は「善医」により、「業」は「懺悔」により対処可能であるという。この冒頭に呼応して、つづけて定業（定まった寿命）を延ばすとの意味で法華経の信心が勧められ、さらに、法華経に出会った尊い命を延ばすとの意味で、檀越であり医術の心得のあった四条金吾の治療が勧められている。ここで治病は延命の問題として捉えら

れ、法華経とともに、医術による延命を勧めた唯一の例である。約三年後の『富木尼御前御書』では同様の教導が簡単に再説され、特に病により生じた「なげき」が問題とされ、人々の法華経不信による末法の惨状に比べ、富木尼は法華経を信じ成仏に疑いがなく「なげき」などないのだとの教導がなされている。

法華経に出会った命を延ばすという意味において、身体的な病を治す医術が勧められたことが、富木尼への教導の特徴の一つである。このことを詳細に検討するには、仏教において説かれている「身病」と「心病」の関連、また富木尼に提示された「病」と「業」との関連、さらには「身心二病」と「病と業」との関連を検討する必要があると思われる。

（日蓮教学研究所研究生）

「本朝沙門」という自称をめぐって

田村完爾

門異相章」にもこの文が引用されている。しかし「本朝沙門」の語の典拠に触れている書は管見の限りないようである。

『観心本尊抄』の冒頭には、有名な「本朝沙門日蓮撰」という称号が掲げられている。日蓮聖人の称号には、その生涯を通じて変化が見られる事はすでに指摘されている。即ち佐前の『立正安国論』の「天台沙門」、『法華題目鈔』の「根本大師門人」という与同天台の表現から、佐渡では天台沙門の身分を蟬脱して本化の自覚に住し、「本朝沙門」を名乗った、という如くである。

この事は古くから注目されており、例えば行学日朝の『御書見聞』には

或義云於三元祖御弘通始末有之、始津方天台沙門  
根本大師門人等書玉へり、末津方御書撰號或本朝沙  
門扶桑沙門ナンドト書玉へり（中略）所詮此等用與  
適時化道ニテ可有之也

の文があり、一妙日導の『祖書綱要刪略』「佐前佐後法

日蓮聖人の閲読範囲の仏教書を繙いてみると「本朝沙門」を名乗った先師は伝教大師最澄だけである。伝教の『法華秀句』と伝教仮託の『末法灯明記』に「本朝沙門最澄撰」とあるのがそれである。この両書は、聖人の教学を支える重要書であると言ってよい。なぜなら聖人は前書に依っては『秀句十勝鈔』という要文集を製して法華最勝を助証し、後書に依っては自己の末法思想の骨子とされたと言えるからである。したがって再三この両書を読まれたであろう事は想像に難くない。その称号を『本尊抄』等で継承して使われた、という可能性が出てくるのである。

その場合、伝教の言う「本朝沙門」と聖人のそれとの間には、内容的にどのような違いがあるのであろうか。「本朝沙門」とは一般的には日本の僧という意味である

うが、伝教と聖人には、法華經弘通という意識の上で共通部分があり、宗教者の自己規定の問題と深く関わっているのではあるまいか。しかしながら日蓮聖人は「我日本ノの柱ノとならむ」「此時地涌千界出現 本門ノ積尊ノ為ニ脇士ト一閻浮提第一本尊可レ立ツ此国ニ」という本化の自覚に立脚しており、この点において伝教大師との相違があるとみなければならぬ。なおこの問題は、日蓮聖人の伝教大師観と関わって、改めて検討しなければならないであらう。

(日蓮教学研究研究所研究生)